

通りの縁(ふち)、寺の縁(へり)、人の縁(えん)
-柏崎市東本町の通りとお寺を活用した公共空間の再構築-
 新潟工科大学 4年 三宅春香

1. 背景

柏崎市東本町は中心市街地と呼ばれ、商業の中心を担ってきた。しかし、商店や利用者の減少によって、商店街は衰退の一途を辿っている。

一方で、古くから現在まで変わっていないものもある。まずは「通り」である。江戸時代に整備された北国街道が現在の本町通りであり、道としての機能と形は変わっていない。次に「お寺」である。本町通り周辺には多数のお寺が立地しているが、そのほとんどは江戸時代までに本町へ定着した。現在は檀家減少や宗教離れなど課題を抱えているが、周辺住民がいる限り、お寺の存在は残り続ける。

2. 目的

本設計では商店が減少してできた空き地に、まちにとってこれからも変わらない「通り」と「お寺」を活用した新しい公共空間を提案する。

提案によって、まちに人の姿・活動が現れることを目的とする。

3. 計画敷地

計画敷地は新潟県柏崎市東本町1丁目とする。敷地周辺には6つのお寺が表通りより奥まった位置にある。敷地は南北に高低差があり、計画敷地内では最大約9mの差がある。計画敷地には浄敬寺、常福寺、妙光寺、光円寺が隣接している。

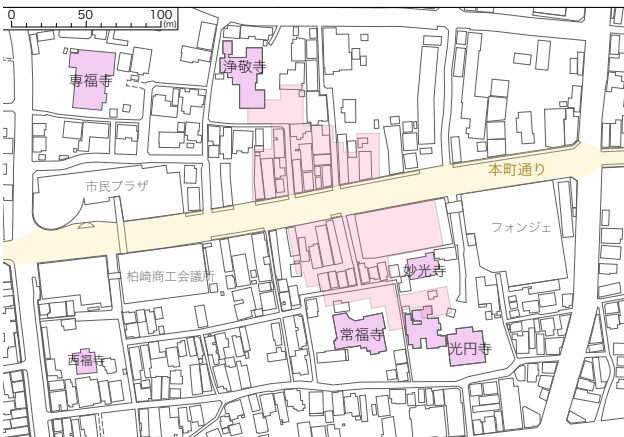


図1 計画敷地

4. 提案

4-1. 水平面

通りのレベルを基準に、南北方向に水平面を作る。北側は通りのレベルまで掘り下げ、南側はデッキを張る。水平面では「通り」と「お寺」の要素が滲み合う。水平だからこそ両者が均一に混ざり合う。

4-2. 通りの縁(ふち)

通りに沿って流れていた人々が溜まる。元の地形に沿った緑地で、北側はイベント場、南側は野外劇場と、バス停の要素を持つ。

4-3. 寺の縁(へり)

水平面を縁取り、堰き止める。元の地形との高低差はコンクリート壁建て、北側は土留として、南側は壁柱として用いる。お寺のパブリックな活動が滲み出し、お寺を強調する要素を持つ。

4-4. 人の縁(えん)

人のつながりを表す曲線。人の縁と寺の縁の間には交流が生まれる空間。北側は屋外空間で、落書き壁やボルダリング、畑といったアクティブな要素を持つ。南側は曲線上にガラス壁を建て屋内空間とし、ワークショップスペースや画廊といった落ち着いた要素を持つ。

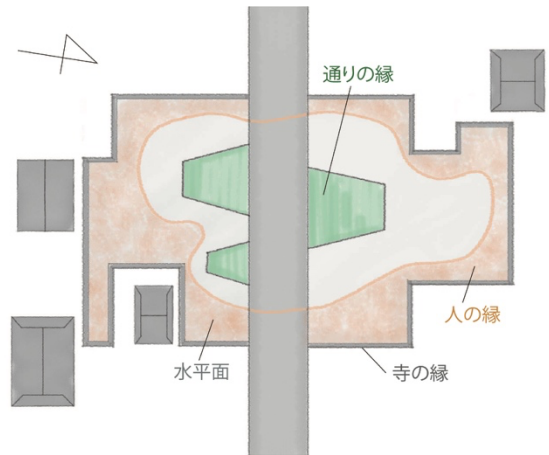


図3 平面ダイアグラム

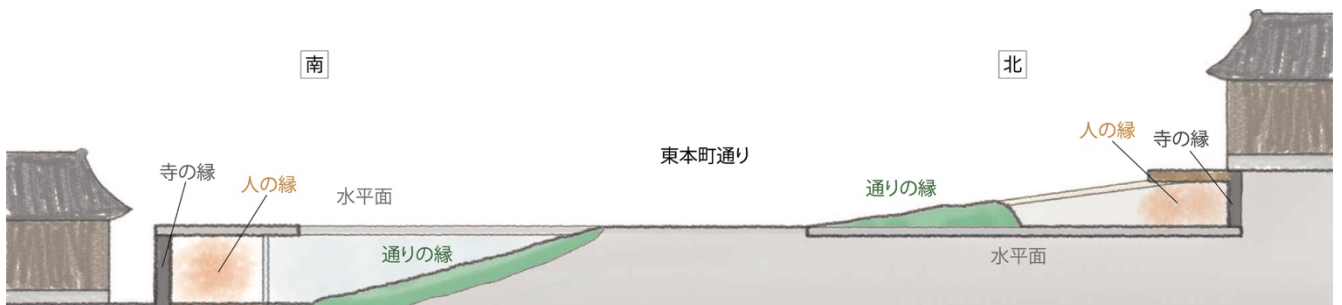


図2 断面ダイアグラム